

# 洋13-51

## 「イノセント・ガーデン」

★★★★★

2013(平成25)年4月12日鑑賞<GAGA試写室>

監督:パク・チャヌク

脚本:ウェントワース・ミラー

インディア・ストーカー(銳すぎる感覚を持つ少女) / ミア・ワシコウスカ

チャールズ・ストーカー(チャーリー)(インディアの叔父) / マシュー・グード

リチャード・ストーカー(インディアの父) / ダーモット・マロニー

グウェンドリン・ストーカー(ジン)(インディアの大叔母) / ジャッキー・ウィーヴァー

イヴリン・ストーカー(エヴィ)(インディアの母) / ニコール・キッドマン

マクガーリック夫人(ストーカー家の家政婦) / フィリス・サマーヴィル

ハイップ(不良グループの高校生) / オールデン・エアエンライク

ピッツルーカス・ティル

保安官 / ラルフ・ブラウン

ジャクイン医師 / ジュディット・ゴドレーシュ

2012年・アメリカ映画・99分

配給 / 20世紀フォックス映画

### <原題の『ストーカー』とは?>

本作チラシには「作者の名前が伏せられた一冊の脚本。その驚愕の展開に、名プロデューサーはうなり、一流監督たちは映画化を熱望した。だが、ハリウッドが求めたのは、パク・チャヌク監督。破滅と激情をエレガントに奏でるアジアの奇才に明かされた脚本家の意外な名は『プリズン・ブレイク』の主演俳優エントワース・ミラー。」と書かれている。残念ながら私はこの俳優の名前を知らないが、パク・チャヌク監督は私が星5つをつけた『オールド・ボーイ』(03年) (『シネマーム6』52頁参照) と『親切なクムジャさん』(05年) (『シネマーム9』222頁参照) の韓国人監督として私もよく知っているすごい監督。

本作の原題は『ストーカー』だが、それだけを見ると今ドキの日本人は「自分が一方的に関心を抱いた相手にしつこくつきまとう人物」という意味の「ストーカー」を思い浮かべてしまう。しかし、本作のそれは人の名前(姓)。つまり、ミア・ワシコウスカ演ずる本作の主人公となる18歳の一人娘がインディア・ストーカーで、ニコール・キッドマン演ずるその母親がイヴリン・ストーカー。また、交通事故で突然死亡してしまう父親がリチャード・ストーカー(ダーモット・マロニー)で、その直後に突如ストーカー一家に闖入してくるのがリチャードの弟チャールズ・ストーカー(マシュー・グード)だ。この家族の名(姓)をストーカーとしたことに何らかの意図があったのかどうかはわからないが、映画冒頭、スカートを風に揺らしながらなぜか叔父のベルトを腰に締めて登場するインディアのモノlogueを聞いてみると、少しづつ本作の不気味さ(スリラー性)が明らかに・・・。

### <邦題の意味は?>

本作の邦題は『イノセント・ガーデン』だが、「イノセント」とは、①無実の潔白な。②純潔な。また、無邪気な、という意味。ストーカー一家の人々は広大な庭を持つ丘の上の屋敷に住んでおり、インディアの誕生日に毎年届けられるプレゼントの靴はこの庭のどこかに隠されているらしい。18歳の誕生日の今年、インディアは1本の木の枝でプレゼントを発見したがその中には靴は入っておらず、謎めいた1本の鍵だけが入っていた。それは一体なぜ? この広大な庭には丸く大きな石が数個置かれており、それが本作のスリラー性を高めることになるから、そんな庭に着目した邦題が『イノセント・ガーデン』だ。

高校生のインディアは成績が優秀なだけではなく五感が人並み外れて鋭く、ひそひそ話でも鮮明に聞こえるらしい。もちろん、18歳のインディアは純真無垢でまだ男も知らないから、まさに「イノセント・ガール」だが、パク・チャヌク監督がこのイノセント・ガーデンを舞台とし、このイノセント・ガールを主人公として展開させていく戦慄の物語とは?

### <この弟は何事にも完璧だが・・・>

本作のストーリーの基礎になるのは、インディアが18歳の誕生日に自動車事故で不審な死を遂げた父親リチャードと、それと入れ替わるようにストーカー一家に入り込んできたりチャードの弟(と称する)チャールズとの関係。もちろんパク・チャヌク監督はそれを単刀直入に説明する愚は犯さず、謎めいたストーリー展開の合い間、合い間にチラリチラリと見せてくれるだけだから、観客は否が応でもスクリーン上に集中せざるを得なくなってくる。出来のいい兄に対して出来の悪い弟という関係は、ジェームズ・ディーンが歴史的名演を残した『エデンの東』(55年)などたくさんあるが、本作では突如現れたインディアの叔父さんにあたるチャールズがメチャカッコいいところがミソだ。

インディアにとってチャールズははじめて見る男だったが、さて母親のイヴリンはチャールズを前から知っていたの? また、ストーカー家の家政婦マクガーリック夫人(フィリス・サマーヴィル)は、なぜあんなにチャールズと言い争うの? チャールズは夕食ではワイン通ぶりを示し、フランス語を流暢にしゃべれば、テニスも得意。さらに料理までテキバキとおいしく仕上げていたから、次第にイヴリンがチャールズに惹かれていたのはある意味当然? いやいや、もしそうであったとしても、母親としては父親を失ったばかりの微妙な年頃の娘の手前、少しはその気持を抑えるべきでは・・・?

ある日、母親とチャールズとの決定的瞬間(?)を目撃したインディアは、悪いことは知りつつチャールズの部屋に入り、その荷物を調べてみると、何とそこにはインディアが18歳の誕生日に受け取ったプレゼントと同じ箱が・・・。こりや一体ナニ? 今まで毎年私にプレゼントしてくれていたのは、ひょっとして父親ではなくこのチャールズだったの? インディアの心中にはそんな疑惑が広がるとともに、カッコいい男性としてのチャールズへの興味が急速に広がっていったが、それって大丈夫?

### <なぜ大叔母はチャールズを恐れるの?>

『オールド・ボーイ』はチエ・ミンシクの「怪演」と、ものすごいアクションが魅力だったが、本作の魅力はセリフが少ない静かなストーリー展開の中で次々と見せてくる映像美。ニコール・キッドマンも「少し年をとったな」という感じは否めないものの、夫を事故で失ったばかりの失意の夫婦といいうイメージとはかなりかけ離れた「魔性の女」ぶりを魅力的にみせてくれる。他方、インディアの方は18歳という年頃だけに時には少女のように見える反面、時には成熟した女の色気を感じさせてくれるから、きっとチャールズは今後イヴリンよりもインディアの方を好きになるのでは?

映画中盤からはそんな予感が芽生えてくるが、物語が急展開していくのは、ある日遠方からストーカー家を訪れてきた大叔母のジン(ジャッキー・ウィーヴァー)が、チャールズが屋敷にいるのを見て動搖すること。それも並大抵の動搖ではなく、身の危険を感じて宿泊するホテルをごまかすくらいだから、ほとんどチャールズへの「恐怖」と言ってもよいものだ。しかし、大叔母ジンをめぐってその後に展開するおどろおどろしい物語とは? 現実には「ええ、そんな・・・」と思う展開になるが、ここら辺りの描き方こそハリウッドが本作の監督として韓国のパク・チャヌク監督に白羽の矢を立てた理由だろう。

### <共犯関係になると、急速に親密感が・・・?>

美人だが、優等生でいつもお高くとまっている女。同級生間におけるインディアの評判はそうだったから、不良グループの男たちがインディアに対して機会を見つけてはチョッカイを出そうとしたのもうなづける。もちろん、インディアはそれを強烈にはねつけていたが、ある日チャールズとイヴリンがいい雰囲気でダンスをしながらよいよキスを交わそうとする姿を見て外に飛び出すと、続いて何ともエキセントリックな行動を。それはガラにもなく(?) 一人の不良を誘惑するという行動だが、意味あり気に入り誘うだけ誘っておいて「ハイ、ここまでよ」と言わされたのでは、欲情の塊のような男子高校生がひき下がれるわけがない。そんな「恋愛ごっこ」に堪忍袋の緒が切れた男が「力づくでも姦ってやる!」ということになると、やはり力は男の方が強いから、インディアの処女は風前の灯。そんなところになぜかチャールズが「正義の味方」然として登場してきたが、さてチャールズの男子高校生に対する報復ぶりは?

『オールド・ボーイ』では金づちが小道具として大活躍したが、本作で大活躍するのはチャールズが腰に巻いているベルト。たしかにこれは人の首を絞めるのには最適の小道具だが、さてチャールズのベルトの使い方は? また人間は何でも2人で1つの目的を達成すると親密感が深まるものだが、殺人という悲惨な結果であってもチャールズとインディアがはじめて2人で共通の目的を達成すると、そこには達成感とともに年齢こそ違え男女の愛情も・・・。

### <母親はどうちらを? この男はどうちらを? そして彼女は?>

どこまでもカッコいいチャールズは、ホントにカッコいい完璧な男? それとも? そこらあたりの真相が見えてくるのはインディアが父親のデスクの引き出し内に隠してあった、チャールズからインディアに宛てられた大量の手紙を発見しこれを読んだ時からになる。世界を旅しているチャールズはインディアが自分と同じように人並み外れて鋭敏な五感をもっていることを知り、愛情に満ちた手紙を各地から送ってきていたから、これを読んだインディアがチャールズに深い愛情を感じたのは当然だろう。

したがって、あの共犯関係成立以降チャールズがインディアといい雰囲気になっているところに出くわしたイヴリンがチャールズに対して「屋敷を出ていくってこれ」と伝えたのは、ある意味当然。イヴリンはインディアとチャールズどちらをとるかと聞かれると、当然インディアをとったわけだ。他方、屋敷を出ていく決心を固めたチャールズは、一緒に出ていこうという話をインディアに持ちかけたから、チャールズもインディアとイヴリンのどちらをとるかと聞かれると、インディアをとったわけだ。しかし、最終的に問われるのは、インディアが母親のイヴリンをとるのか、それとも屋敷を出ていくチャールズをとるのか、ということだが、さてインディアはどんな選択を? ちなみに、ここで重大なポイントはあの大量の手紙がホントに世界各国から送られてきていたのかどうかだが、それは手紙の消印を見ればすぐにわかること・・・?

映画前半に巧みに仕掛けられたそんな前提事実(?)は、チャールズとインディアとイヴリン三者の関係が決裂状態になってくると、大きな意味をもってくる。イヴリンにしてみれば、チャールズが屋敷を出ていくのは当然だが、まさかインディアと一緒に出ていくなんて全く想定外! まして、チャールズとインディアとの間に男女関係があったことなど絶対に認められないことだ。スクリーン上にはインディアが見ている前で再びチャールズとイヴリンが濃厚なキスを交わそうとするシーンが登場するから、一瞬「アレレ?」と思ってしまうが、その後の展開はパク・チャヌク監督流演出のミソ。このあうと驚く絡みと、銃が誰に対してどのようにぶっ放されるのかに注目!

### <衝撃の結末にビックリ! 少女の多面性にも!>

本作でインディアを演じたミア・ワシコウスカは、昨年11月28日に観た『アルパート氏の人生』(11年)で女か男かよくわからない人物が主役や準主役として登場する中、一人だけがわいわいメイド役で登場していた女優。そこではあくまで、若くてかわいい女性というだけの役柄だったが、本作ではとても多くの面を持つ複雑でエキセントリックな女の子インディア役を見事に演じている。毎年の誕生日プレゼントを喜ぶかわいい女の子だったインディアが、父親の死、チャールズの登場、思わず共犯関係の成立、そしてあの銃撃騒動(?)、そんなこんな経験を重ねる中で、こんなにも変わっていくの? パク・チャヌク監督はそんな変化を、通常の世間や家庭では考えられないミステリアスな展開の中で見事に描いていく。

あの大活躍した銃を側に置き、チャールズの車に一人で乗ったインディアは、今一体どこへ向かっているの? そもそも、インディアは運転免許を持っているの? そんな風に暴走運転するインディアの車がパトカーに見咎められたのは当然だが、さあそこから本作でパク・チャヌク監督がみせる衝撃の結末とは? これは絶対誰にも予想できないものであるうえ、それが本作冒頭のシーンで見た「スカートを風に揺らしながら、なぜか叔父のベルトを腰に締めたインディアの姿」に結びついていくから、お立合い! この見事な演出に口あんぐりとなった私は、即座に本作は星5つと認定!

2013(平成25)年4月15日記